

はじめに

西山雄二

(東京都立大学)

フランスの哲学者ジャック・デリダ（1930-2004年）が提唱した「脱構築」の思想は、哲学のみならず、文学、政治、言語、倫理、教育、芸術、精神分析など多岐にわたる分野で影響を与えた。ジャック・デリダは2004年に74歳で死去したが、その後も数多くの著作や関連書籍が刊行され続けている。未刊遺稿や草稿などの資料群が米仏で保管されており、デリダの思想形成を見定める上で重要なアーカイヴ研究も進められている。

2008年からデリダの講義録シリーズ（全43巻）の刊行が開始された。彼は生涯に渡って教鞭を執ってきたが、教育者デリダの思考過程を検証することができる点で講義録は極めて重要である。個々の既刊著作はかなりの部分がセミナーに依拠しているため、講義録を分析することで、デリダの思索過程を詳細に把握することができるのだ。

まず、最晩年の講義から遡る形で、『獣と主権者』（2001-03年）、『死刑』（1999-2001年）、『偽誓と赦し』（1997-99年）と順次資料が公刊された。デリダはバリの社会科学高等研究院で毎週セミナーを実施したが、1991年度以降の大主題は「責任の問い」と名づけられ、病気で亡くなる直前の2003年まで続けられた。これらの刊行によって、晩年のデリダが同時代の政治・社会的文脈においていかに思考したのかが明らかになった。

また、1960-70年代に遡って、『ハイデガー——存在の問いと歴史』（1964-65年）、『生死』（1974-75年）、『理論と実践』（1975-76年）も刊行されている。『ハイデガー』からは1960年代に脱構築思想を練り上げるデリダがいかにハイデガーを読解したのかがうかがえる。『生死』において、デリダは生物学のサイバネティクスの関係か

ら生きものの論理の再考を試みている。『理論と実践』では、マルクスやアルチュセールが読解され、理論と実践の対立とは異なるプラクシスの次元が検討される。

本特集で取められている論考三編はいずれも、こうした新資料の内容を盛り込んだデリダ研究の成果である。カトリーヌ・マラブーの論考では、デリダ晩年の思考、とりわけ『獣と主権者』講義が動物学と生物学を問題化し、フーコーとアガンベンの生政治を批判する射程を備えていることが論じられる。フランチェスコ・ヴィターレは『生死』講義を集中的に読解し、現代の生物学者たちの言説をエクリチュールとプログラムという視座からデリダがいかに考察したのかを示す。エドワード・ベアリングは、1964年の未刊行講義「歴史と真理」を参照することで、初期デリダにおける歴史と真理の問題を考察し、デリダの分析に対する歴史学者の両義的な応答を明らかにする。

論考を提供していただき、翻訳の許可を与えてくださったマラブー、ヴィターレ、ベアリングの各氏には心より感謝申し上げる次第である。また、翻訳は博士論文を終えた若手のみなさんに依頼し、的確で丁寧な訳文に仕上げていただいた。心からの謝意を表明したい。

*本特集は、JSPS科研費・基盤研究 (C)「ジャック・デリダの講義録「責任の問い」の思想史的研究と国際的研究基盤の構築」(No. 20K00102)の一環です。